

LLAシニア会通信

No. 2

June 17, 2008

LLA 初期の頃の思い出

大八木 廣人

初代会長・中島文夫先生の頃

LLA 初代会長の中島文夫先生が LLA 運営委員会に出ておられたのを一度だけお見受けしたことがあります。昭和48年か、49年頃のことだったのではないかと思います。当時私は大妻学院視聴覚教育センターに勤務していました。中島先生は、LLA が設立された昭和36年頃は東京大学文学部長でしたが、当時は津田塾大学学長で、近寄りたがたい威厳を持ちながらも、優しい目とソフトな声をしておられました。副会長は大妻女子大学の黒田巍先生と帝塚山学院大学の西本三十二先生で、関東支部の支部長は大妻女子大学の天野一夫先生でした。なお、当時は、関西支部を除いて、支部長が副会長だったわけではありません。因みに、中部支部長は名古屋大学の中条宗助先生、九州支部長は九州大学の渡辺脊吉先生でした。関東支部選出理事は中島文夫、黒田巍、天野一夫、大澤茂、大島好道、大東百合子、大柳英二、高本捨三郎、志村精一、田中康一、矢野創の各先生方でした。昭和48年2月現在の記録からです。

2代目会長・黒田巍先生の頃

中島先生は、その後ご多忙であったり、体調を崩されたりで、関東支部の運営委員会や理事会には出席されなかったように記憶しています。数年後、黒田巍先生が会長に、天野一夫先生が副会長を兼務されました。黒田先生が会長に就任されたのは郵便投票による選挙でした。現在のように、全

目次

大八木廣人…LLA 初期の頃の思い出
宇佐美昇三…英語と映像の狭間にて
渡辺治…LL それでは出会い系サイト
羽鳥博愛…LLA で学んだこと
松田洋一…LLA シニア会に出席して
浅野博…「教材論」への疑問

国研究大会前日に開催される理事会ではなかったわけです。何人かの先生方にご相談しながら、私が選挙のとりまとめをしました。従って、会長選出は初代会長の場合を除いて、すべて投票によって行われたこととなります。

関東支部運営委員会のこと

当時、関東支部の運営委員会には、企画や部会などの組織はなにもなくて、支部長に個人的なつながりのある人がその任に当たっていたようです。津田塾大学に本部事務局があった頃は大東百合子先生や天満美智子先生が細かい作業をしておられたようです。また、設立当時から事務的な作業に当たっておられたのが鈴木博先生や金田正也先生などでした。私が天野先生のご指示を受けながら苦労している頃、数名の方々を呼び集めて支部の事務作業を組織化するのが積極的に進めて頂いた方が石川達朗先生でした。企画や部会組織ができあがったのは昭和五十年代の初め頃で、その後事務局が早稲田大学や明治学院大学に移る度に現在のような組織ができあがっていきました。早稲田の栗山昭一先生や森田彰先生、明治学院の黄金井建夫先生や滝本晴男先生等のご努力がありました。

関東支部の研究会開催のこと

関東支部研究会は、昭和40年代になると年間3回から5回は開催していましたから、プログラム作成が大変でした。当時は、企画や研究部会のような組織ありませんし、PCなどによる情報交換がスムーズにできませんでしたから、発表者の依頼が大変でした。当時、「天野メモ」というのがありました。天野先生はふと気がついたことをいつでもどこでもメモしておくという習慣を持っておられて、その「天野メモ」には発表するに足りるだけの研究や実践をしている方のお名前が書いてあって、そのメモに従って、私が電話やお手紙で交渉していました。それでも、年間4回も5回も研究会を開催すると、ホッとする間もなくプログラム作成に追まわられていました。とは言え、東北地方では氏家昭一先生が、新潟では立間実先生や高橋満先生を中心とする高校部会の先生方が、教育委員会や英語部会の後援名義使用許可申請手続きからプログラム作成に至るまで、ほとんどの作業をやって頂きました。更に、茨城での村上董男先生、山形での松田洋一先生などのご努力も忘れることは出来ません。

英語と映像の狭間にて (その1)

宇佐美 昇三

◆ライターさん

私と英語教育番組の縁は1958年、国際基督教大学(=ICU)院生時代に始まる。そのころは児童娯楽のない時代で私は巡回人形劇団に参加し、せりふ・操作、照明、音響などをやった。毎回違う観客に直面して、それぞれに「受ける台本」や映像の効果、場面のつながりなどに強い関心を抱いた。1959年1月、教育テレビが始まりNHK学校放送班は映像的な教育番組開発に苦闘していた。すべてナマ放送なのでPD(映画監督に相当する番組の演出担当者)

は実験準備で多忙である。アルバイトの私が「台本」というものを書いた。映画シナリオはプロ作家の仕事だが、私はライターという「材料を並べる構成者」だった。

◆プロジェクト・メソッド

PDは「何がテレビ的か」という熱い議論を、スタジオの内外で繰り広げていた。動くものはテレビ向きということで、開園したばかりの多摩動物公園や伝統のある上野動物園で16ミリの映画カメラで、動物を撮ってきて、園長や飼育課長が解説する番組にまず、駆け出しライターは付けられた。虎やライオンは昼間寝ているので、深夜の撮影になる。現場を見ないでライターは勤まらない。大田区の自宅から高幡不動まで出掛けて、撮影に付き合くと帰宅の電車はない。飼育係と宿直室に泊まると、枕元に大きな鉄砲が置いてあった。象や猛獣の脱走に備えて強い麻酔弾がつめてある。暴発して私に命中したら永久に醒めないのではと思った。翌朝、三鷹にあった大学に出ると、授業はほとんどが英語である。前夜半、咆哮していた虎はお休みの時間である。はっと目覚めると講義は先に進んでいるし、院生は3-4人なので、ごまかしが効かない。

ICUでは「視聴覚教育」専攻だったので、掛図の作り方から、デールの経験の三角錐、実験計画法など基本的なことを学べた。コース主任の西本三十二先生はコロンビア大学でキルパトリックに学び、あるとき個人的に「コンコミタント・ラーニング」の話をしてくださった。私は生活教育で知られた和光学園中学高校出身だったので、在学中に聞きかじっていた「プロジェクト・メソッド」を提唱したのがキルパトリックと知って縁を感じた。西本先生はのち帝塚山学院大学学長、LLA(LETの前身)の副会長兼関西支部長をされた。



◆テレビ的とはなにか

ライターとしての腕はあがらなかった。落語などで学んだ「しりとりに」ができればいいと、浅はかに、ある話題から次の話題にどう繋げるかが、腕の見せ所だと考えていた。例えば「水鳥には水掻きがありました。さて動物でも水掻きが…」と蛙など爬虫類に話題を転換すれば、俺はうまいと自負していた。(1971年に「セサミストリート」の日本語版の初代担当になって「しりとりに」がない構成法というものがあり、それがテレビ的だと知った。)中学生向けの「英語教室」の構成を持たされた。主演者はウィリアム・ムーア先生で当時はICUの教授だった。ここでは、先生の意向を聞き取って、文字を効果的にだすかという「視覚化」に努力を傾けた。例えば書物の小道具に仕掛けをして「BOOK」という文字が出てくる「引抜き」である。歌舞伎俳優がさっと衣装を変える引抜きをみていたのが役立った。

◆映画言語というテーマ

大学院ではNHK放送文化研究所副部長の布留武郎という元ディレクターで心理学専攻の先生が非常勤で、実験や調査の事例を講義された。アメリカ軍が戦時中に盛んにした映画やスライドと普通授業の比較実験、布留先生がNHKで従事された「静岡調査」である。前者は戦時で兵舎という統制された環境、後者はテレビがまだ普及していない地域で、大量のサンプルを使用し、その前後比較による効果調査で、どちらも、そうした時期、環境内でないと、めったにできない研究であった。

私は児童向け映画でオーバーラップやカットバックなどで回想や追掛けを表現するが、はたして児童に監督の意図通り理解されるのか、その理解は何歳ぐらいからはじまり、読書や映画やテレビ視聴歴とどう関係するのかを実験的手法で確かめ、それを修士論文にしようと企画した。だが実験結果は無残な…(次回に続く)

LL--それは出会い系サイ

ト

渡 辺 治

① 学生時代に「英語科教授法」の実習でアメリカ人N教授のLL授業を見学した。「これから諸君が教員として働くことになる中学や高校にはこんな設備が入るはずだ。使い方を覚えておくとよい。」この言葉が耳の底に残っている。これがLLとの最初の出合いである。自分自身が中学高校で学んで来た英語の授業と全く違う授業があることを思い知らされた。

私立の高校で英語教師をスタート。校舎の移転を機会にLLの機能を持つ「視聴覚教室」が設置されたが、機器についての知識も経験も乏しい新米の私は、うまく活用できなかった。これもLLとの一つの出合いだった。

② 新設の都立狛江高校では、校舎の設計段階からすでにLL教室が計画されていて、英語科教員を中心にLLの設計を担当した。ベテラン英語教員の中に石川達朗先生の元同僚というM教諭がいて、「君がLLのことを勉強したいなら石川さんを訪ねるとよい。」とアドバイスしてくれた。また、狛江市は府中市に近く、いわばお隣さんの府中東高校の落合二郎先生に出会うことが出来て、ハード、ソフトの両面に渡って貴重なアドバイスをいただいた。

狛江高校では、「せっかくこんなすばらしい設備が入ったのだから全生徒にこの恩恵を」という方針で、英語科の全教員がLL授業を担当することになった。そこで機械に弱い教員でも使えるLL教材の開発に取り組んだ。新採用の若い教員も放課後遅くまでLL準備室で教材作りを続けた。一つ

の学校の中にも協同作業と言う貴重な出会いの場があった。

③ 紹介された石川達朗先生からLLAという学会の存在を教えられ、高校部会の活動に加えていただいた。高島健造先生始め多くの方々と出合えて、LL運営の基礎から自分自身をタタキ直すと同時に学んだ情報は即刻狛江高校のLLの活用に役立てることが出来た。高校部会を足掛かりにしてさらに多くの先生方と出会うことが出来た。狛江高校に鈴木博先生をお招きして研究授業を行い、狛江高校の全英語教員を対象に研修会を開いたりした。石川先生が戸山高校を退職されて、その後任として私がそこに異動して行った。これもLLが御縁となった出会いのおかげである。

伝統校として知られていた戸山高校では、指導方針の根底に柔軟な姿勢があった。学習者中心の授業の中で各自が持っている能力を十分に引き出して行く、というもので、それは教授者側についても適用された。音声英語教育に関心を持っていたK教諭の協力を得てAETの導入を推進し、やがて、定員減で空いた教室をLLにする要望を東京都教育委員会に出してLL教室設置が実現した。進学校に相応しいLL教室の運営を心掛けた。

④ 以上、自分の勤務校を中心にして多くの方々とのお出会いを取り上げたが、これがすべてではない。その上、LLAの方々との出会いによってそれがさらに大きな輪になって行った。研究会の企画の仕事に加えていただいて、その輪は二重、三重に、地方にまで、広がった。

LL、それは私にとって、「出会い」のキーワードである。

LLA で学んだこと

羽鳥 博愛 (LLA 名誉会長)

1 私はずいぶん長いことLLAの会員であったが、実は研究発表をしたことは1度も無い。しかし、司会をしたことは何回もある。元会長の大八木廣人さんは、「実にくだらないと思うような研究発表でも、何か価値があるようにまとめてくださる」と言ってくれていた。これは褒め言葉だと受け取っていいと思うが、他にも褒めてくれた方が何人かいる。ある会するとき、司会が終わった後「あなたはまとめ方がすごくまいんで、元NHKのアナウンサーだったのではないかと思った」と言ってくれた人がいた。こんなコメントを聞くとやはり嬉しい。司会については、私は結構気を遣っている。発言者がそれぞれ決められた時間内で終わってくれるように神経を使っているが、もっと気を遣っているのは、発言の内容を簡潔な言葉でまとめることである。このためには、その人が話しているとき、精神を集中してよく聞いていなくてはならない。この習慣は司会をやっていたお陰で身についたように思う。

2 次にLLAのお陰だと思っているのは、授業順序、いわゆるteaching procedureを綿密に考えるようになったことである。LLでは、テープをいつ、何回聞かせるか、どうやって練習させるか、monitoringはどうやるかなど、いろいろ授業の進め方を慎重考えざるを得ない。いつの頃だったか忘れたが、石川達朗さんなどがさかんに言っていて、flow chartというのが流行ったことがある。授業のやり方は誰でも大雑把には考えるが、flow chartのお陰で授業の各段階の意味を十分考えさせられた人が多いのではなからうか。私は全国いろいろの英語の研究会に参加する機会があったが、LLを扱っている先生たちのほうが、そうでない人たちよりも授業順序を細かく考えていたと痛感している。

3 もう一つ、私がLLAのお陰だと思っているのは、先生方の発音が良くな

ったことである。LL で授業をしていると、授業のたびにテープで良い発音を聞いているせいか、自然に発音が良くなるように思う。他の学会で発表者が英語の発音をしているのを聞くと、ぎこちないと思うことが少なくないが、LLA の会ではそう感じたことは私にはない。私もお陰で、発音を褒められたことが何回かある。アメリカの学会で時々発言したことがあるが、あるパーティーで私がそばにいないと思ったのか、確かドイツ人だったと思うが、「ああいう発音は私には出来ない。もっと私も勉強しなくちゃ」と友人に向かって話していたのを聞いて、くすぐったい思いしたことがある。また、ある分科会で私が話しているのを聞いたアメリカ人の女性が、その会の後で、面と向かって褒めてくれたことがある。これはまさに LLA で仕事をさせてもらったせいだと思う。

LLA はまさに私の人生にとって貴重で有意義な学会だったと思う。

『LLA シニア会』に出席して

松田 洋一（山形県）

[1]平成 20 年 3 月 31 日（月）に東京（茅場町）で開かれた第 3 回 LLA シニア会に参加し、昔の会員の方々と二十何年かぶりにお会いしました。山形県に最初に LL 機器が入り、それが私の勤務高校に設置されました。最初は何も分からず、LL を実際に使っている高校の視察をしたり、研究会に参加したりしました。

[2]福島県の桜の聖母短大での研究会で、当時都立国立高校勤務だった石川達朗先生がパネリストとして参加しておられました。その後、石川先生の実際の授業を見せていただいたり、当時の私の勤務校であった新庄北高校まで来ていただいたりして指導して

いただきました。『LL と英語教育』の著者浅野博先生からは直接に手紙で指導していただいたりして、お陰様で、私もモデル授業を行うことができました。

[3]また、山形県で初めて LLA 関東支部の研究大会が行われ、会長の羽鳥先生と関係者への挨拶廻りを鶴岡、新庄、山形と車で廻ったことが懐かしく思い出されます。鶴岡南高校での LLA 研究会を無事に終わらせることができたのも先生方のお陰と感謝申し上げます。私は高校を転勤するたびに LL 機器を採用して授業で使用しました。山形英語研究会の中に「LL 教育研究会」の部門も設置されました。LL 設置校が二十数校になったと記憶しています。

[4]公立高校定年退職後は、日大山形高校に移りましたが、その頃にはいつも教材を作って授業にのぞむという姿勢が LL 教育で養われていました。LL がないところでは、テープから紙に換えて、B4 一枚の教材は毎時間用意して教室に行きました。これ一枚で、同学年の担当クラス分はありますので、大変有効に授業を行うことが出来ました。定年退職後、おまけに 13 年間（日大山形高校 8 年、山形工業高校 5 年）も勤務できたのも LL 教育を実践したからだと思っています。

[5]また 第 1 回 FLEAT 大会にお手伝いを頼まれ、ホテル・オークラに 2 日間格安で宿泊できた思い出も強く残っています。LLA で知り合った先生方はみなさん素晴らしい先生方で、この日のシニア会の昼食会にご参加の大井上先生、国吉先生、鈴木博先生、渡辺治先生、森田先生などの方々とは、昔から現在までの話題について、飲みながら談笑出来ました。ほとんどみな年配ですから、健康上か、その他の悩みも持ち合わせており、自分だけではないとわかり、大変に有意義でした。

またお会いできるのを楽しみにしております。

「教材論」への疑問

浅野 博

私は長年 LL 教材を使用したり、作成したりする立場にあったが、日本の英語教育では「教材論」というものがあまり発達していないという感じがしている。英語科教育法のテキストでも、ほとんど教材論というものがない。「コミュニケーション・アプローチ」では、Authentic materials（本物教材）ということを重視しているが、これは簡単に言えば掲示、広告、日常的な書類などの表現を重視するものだ。日本人が英語国を旅行したりすると、こういうものに関する知識が十分でないことを思い知らされるのは確かだ。でも、こういう実用性の高いものは、必要とする状況になればいやでも覚えるものではなからうか。したがって、学校の英語教育では、もっと基礎的な訓練をすべきだという意見も傾聴に値すると思う。

皮肉なことに、学習指導要領（外国語）の「内容の取り扱い」のほうが、「題材の形式としては、説明文、対話文、物語、劇、手紙などのうちから適切に選択すること」といった注意をしている。こうした“形式”などについても、英語教師は論じることがほとんどないと思う。

「感動的な教材を」というのが、かなり昔から現場の声としてあがっていたことは事実である。しかし、これはあまりにも抽象的で、このままでは議論の対象になりにくい。いつか故若林俊輔氏と話しているとき、彼が「高校入試の長文問題の内容は実にくだらない。こんなものを読まされる受験生は気の毒だ」ということを言われたので、私は「試験問題が興味のあるもので、面白かったら、後の設問に答える気になれないのではないか。試験問題の内容は、わかる者には、何だそんなことか、と思えるようなも

のでよいのではないか」と反論したことがある。飲み会の席上だったので、そのままになってしまったが、私は今でもこの考えは捨てていない。

20年以上前に、私は大修館書店から出していた LL 教材の1つに、大野充子『かあさんのうた』の英訳を載せることを提案して、採用された。これは、広島に原爆が落とされた日に、傷つきながら逃げて来る犠牲者たちを、大きなくすの木が眺めた記憶を語るものである。一人の女学生が幼い男の子を抱いていて、やがて夜になると、その大木の根本で、母を恋うて泣く、知らない男の子の母親になって、その少女は子守唄を歌ってあげるのだった。やがて、子どもは泣き止み、子守歌の声も小さくなっていく。そして、夜明けが来ると、二人とも動かなかった、という悲しい話である。

この LL 教材は、「会話文」と「説明[物語]文」の2部構成になっているが、会話部分は、元 FEN のアナウンサーだった米人が、広島の平和公園と展示館の見学後の心境を語るという状況を書いてくれた。そして、見学後には「心境は複雑だ (I had mixed feelings)」と。なぜかと言うと、ここには、戦争の悲惨さを強く訴える力があるが、アメリカとかアメリカ人を責めるものがないことに、アメリカ人としては“複雑な”心境になるというわけである。

この教材は、後に私の関係している中学校用検定教科書にも採用されたが、ある地区の米人 ALT は、連名で抗議書を送ってきたことがある。「こういう教材を英語の教科書に載せる意図がわからない」「もしアメリカで使われる日本語の教科書に、日本軍による真珠湾奇襲が題材になっていたら、どう思うか」といった趣旨のものであった。こちらの意図を丁寧に説明したら、納得してくれたようだったが、多くのアメリカ人は、原爆投下については、良心の呵責を感じているので、日本人も対応には慎重であるべきであろう。

この LL 教材を東洋学園大学で用いたことがあるが、いつも積極的に練習をす

る女子学生が、Questions & Answers の段階になっても全く声を出していないのに気づいた。相互通話装置を利用して尋ねてみると、「あまりにも悲しくて練習する気になれません」と言うので、「気持ちが落ち着くまでじっとしていなさい」としか言いようがなかった。先の試験問題の件と同じように、じっくり味わうべき内容のある教材は、「練習」や「テスト」には向かないのだと思う。

「感動的な教材」を語学の練習に使うのは能率的ではない。鑑賞教材として、自発的に読んだり、聞いたりするのが一番よいのだと思う。そういう意味でも、「教材論」についての、考察と議論が十分に、教員間でなされていないことを反省したい。

第3回「LLA シニア会」昼食会 (2008年3月31日)



今回は MIYABI Café & Bar (カフェバー・みやび) という東京駅から徒歩 10 分ほどの日本橋兜町にある店を 3 時間ほど借り切って昼食会を持ちました。出席者は下記の 11 名で、一風変わった料理と昔話を楽しみました。

森田 彰・大八木 廣人 渡辺 治・石川 達朗
石丸 玲子 浅野 博 鈴木 博
松田 洋一 国吉 丈夫
大井上 滋 羽鳥 博愛

編集後記

今回は6名の方の記事が集まりましたが、浅野の6月中に都内へ引っ越すという個人的な事情から、発行が遅れましたことをお詫びいたします。したがって、執筆者に校正をしてもらう時間もとれませんでした。特

に、メールではなく、郵送で原稿を寄せられた方のもは、趣旨は変更していませんが、表記や言い方が多少変更されている点をご了承ください。この「便り」は LET のホームページからのリンクで、会員

の方に読んでいただく機会も得ております。今回寄稿されなかった方も、次回(約半年後)には次号を発行しますので、よろしくお願いいたします。

幹 事：

浅野 博・大八木 廣人